

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月行っているフロア会議や申し送り、ミニミーティングの時などの際、職員全体で理念に基づいたケアが行われているか話し合っている。また、採用時研修においても理念についての話し合いの機会を持ち意識づけを行っている。	法人の理念「その人らしく生き生きと」をホームの理念とし、日々のミーティングや毎月のフロア会議で理念に基づいた介護が提供されているかを話し合い確認し合っている。理念にそぐわない言動が見られる場合は業務中に具体的に伝えたりフロア会議で話し合っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	散歩等の外出時に地域の方々や挨拶を交わしたり、畑で獲れた野菜や果物を頂いた。市役所へ千羽鶴を届けたり、幼稚園や小学校、中学校への雑巾の寄贈、三九郎、夏祭り、文化祭へも参加している。地区の常会にも加入し回覧板を回している。また、中学生が千羽鶴を広島に届けた際の報告会を当施設にて行なった。	街中にあり常に地域の人々と顔を合わすことができている。散歩の途中で挨拶を交わしたり野菜をいただいたりする。地域の文化祭や行事に参加したり、ホームの行事に地域の方々に参加していただくなど交流が盛んに行われている。幼稚園児、小学校児童、中学校・高校の生徒など幅広い世代との交流もあり、地域に開放されたホームとなっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	小中学生の職場体験学習、中学校総合学習の交流、高校、専門学校の実習生やボランティアの受け入れ、県社協福祉の職場体験等多くの実習生の受け入れを積極的に行っている。また、施設長によるこまくさ祭りで地域の方々に向けた講演会や、医療介護連携推進協議会での講演会を行った。施設長は松本広域連合介護認定審査委員の一員でもある。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	前年同様の出席者に加え、日頃お世話になっている地域の方々や今年度より新たに福祉協力員、地区の老人会、障害者就労支援施設そよ風の家、小中学校PTA、自衛消防隊の方々をお呼びし行っている。学校行事の日程調整や防災、防犯対策等、意見や情報を交換し合い連携を深めている。	2ヶ月に1回開催されている。固定の委員以外にその時々テーマに応じて消防署員、警察署員、老人会等の方々をお呼びし活発に意見交換が行われている。会議記録は職員に回覧し意見や要望を日常業務に活かしている。1ヶ月前に次回の予定を計画しテーマに応じた分野の方にも出席依頼をしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市の介護相談員が定期的に訪問し、利用者の思い等相談に乗ってもらっている。認定更新の機会等に利用者の暮らしぶりやニーズを伝えホームからも情報発信を行い連携を図っている。地域包括支援センター職員の研修も行った。	在宅介護支援センターがかかわっていた独居の方が生活困難とわかり協力して入所していただいたケースがあった。介護相談員の方が2~3ヶ月毎に来訪し、利用者の思いを聞いたり相談にのったりしていただきその時々様子を書面で報告していただいている。介護認定調査はホーム内で実施し家族と職員が日頃の様子を調査員に伝えている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	研修や勉強会で身体拘束について学ぶ機会を作っている。また、フロア会議や日頃のミーティングの中で利用者の抑圧感を招いていないか確認し合っている。ホームでは日中鍵を掛けておらず、玄関、居室等から自由に外へ出て掃除や畑仕事、花の手入れ等できる様支援している。また、利用者が外出されようとされたらさり気なく一緒にいていく等安全面に配慮して自由な暮らしを支える様にしている。	日中は窓や玄関のカギは開錠している。利用者は洗濯物を干したり、畑に行ったりと自由に出入りしている。外出しようとしている方がいたらさりげなく一緒に外出し周辺を散歩している。研修や勉強会で身体拘束について学習したり、フロア会議で日常の介護が利用者を束縛したり、抑圧感を与えていないかを話し合い振り返りを行っている。危険回避のためのセンサーマットや車椅子ベルトを使用している方はいない。	

グループホームこまくさ野村宮の前・南棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	採用時研修において、高齢者虐待防止関連法に関する勉強会を行っている。会議やミーティングの場などで適切なケアが行われているか、見過ごされていないか話し合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	採用時研修において権利擁護に関する勉強会を行った。成年後見制度の講習会のチラシなど利用者、家族等に情報提供している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、料金や看取り、医療連携体制等、時間を取って丁寧に説明し家族の不安や疑問等に応じながら同意を得る様にしている。介護報酬の改定や物価などの変動により利用料が増加する場合は、納得を得られる様に説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の訪問時には、現状報告をするともにささいな事や気になる事がないか思いを聞くよう職員から働き掛け、話しやすい雰囲気作りに努めている。運営推進会議に参加していただき、思いや意見を出してもらう機会としている。遠方の家族にもホーム便りをお送りし日頃の様子等お伝えしており、伝言やお手紙を頂いた。	ほぼ全員の利用者が言葉で自分の思いや意見を伝えられる。家族には面会時に現状報告と同時に思いや意見を聞くようにしている。また運営推進会議に参加していただき意見を述べる機会をつくっている。ホーム近辺から入居されている方が多く、毎週家族の面会がある。遠方の家族にはホーム便りを送付したり電話で利用者の様子を知らせ意志疎通を図っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日頃からコミュニケーションを図るように心がけ職員の気付きやアイデアを聞くように心がけている。月1回のフロア会議には理事長も参加し、意見や要望、ケアの方向などについて、話し合っている。また、ホームの環境美化について職員間で話し合い、今年度より障害者福祉センターすみれの丘による清掃業務を週に一度委託している。	ホームの清掃に関しての職員の要望が取り入れられ実施されている。新人や気になる職員に直接意見を聞いたイベントのリーダーになった職員に意見を聞くように努めている。法人全体会議が毎週木曜日に開催されている。フロア会議は毎月1回、19時30分から開催され、遅番以外は全員参加し意見交換も活発に行われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者も現場に来て、利用者と過ごしたり個別に職員の業務や悩みを把握する様に努めている。年数回自己評価を行い、職員が向上心を持って働けるよう働きかけている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実践と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部研修の情報を収集し、なるべく多くの職員が受講できるようにしている。また、参加した研修報告は法人リーダー会議で伝達講習し、研修報告書を全職員が閲覧できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	研修などを通して他事業者との交流が図れるようにしている。同法人のグループホーム同士でもリーダー会議や運営推進会議を通して情報交換を行っている。		

グループホームこまくさ野村宮の前・南棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス利用について相談があった時は、利用者、家族と面談をし、心身の状態を把握する様に努め、本人の希望や不安を理解し、安心して頂ける様にしている。また、入居予定日前から訪問して頂く機会を作り、本人も家族も安心できる関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族には、入居前にグループホームの様子を見て頂き、グループホームとしてどの様な対応ができるのか、事前に話し合いをしている。また、今までの家族の苦労やサービスの利用状況等を、ゆっくり聞くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時、必要であれば、ケアマネージャーや包括支援センターに繋げる等の対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員と利用者とともに生活し合う仲間と考え、日々の生活の中で一緒に喜んだり、楽しんだりできる場面作りをしている。利用者の得意な料理や畑仕事、裁縫、生け花等、教えて頂く機会が多い。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の日頃の状況をこまめに報告、相談するとともに、誕生日会にお招きし一緒に関わって頂く場面作りをしている。今年度は100歳の誕生日会に家族や親戚が集まり皆でお祝いを行なった。市役所からの100歳のお祝いも家族と一緒にした。また、年賀状や手紙を送り、家族との関係が途切れない様にしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	行きつけの美容院や、以前より通われていた教会への外出、お盆の帰省、娘さん宅への外泊、お孫さんの結婚式の参列の為の外出や外泊など利用者一人ひとりの生活習慣を尊重している。また、その方の知人や友人の来訪時、継続的な交流ができる様に働きかけている。	ホーム近辺からの利用者が多く、知人、友人も近くにいるため来訪者が多い。買い物や散歩の途中で行き合うこともある。電話や手紙でやり取りをしている方もいる。馴染みの美容院へ出かけたり教会に通われる方もおり、出来る限り今までの関係を継続できるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	皆で楽しむ時間や気の合う者同士で過ごせる場面作りに努めている。また、役割活動を通してより良い関係作りを心掛けている。一方で、一人で落ち着ける環境作りにも配慮している。		

グループホームこまくさ野村宮の前・南棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用が終了されてもご近所の家族と挨拶を交わす等、関係の継続に努めている。以前利用されていた方のご家族から野菜を頂いたりもしている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わりの中での言動や表情、行動から本人の思いを汲み取るようにしている。意思疎通の困難な方には、ゆっくり話して頂いたり、家族や以前利用していた事業所から情報を得て本人の視点に立って話し合っている。	ほとんどの方が言葉で思いを伝えられる。困難な方には表情や動作から汲み取り希望に沿えるよう、臨機応変に対応している。大勢の中では表出しにくいと感じる方には一対一でゆっくりと話を聞いたり、夜にお茶を飲みながら関わり思いを汲み取っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	プライバシーに配慮しつつ、利用者一人ひとりの生活歴や生活環境、なじみの暮らし方、個性や、価値観など把握に努めている。本人や家族などからお聞きしたり、他事業所からも利用時の様子など教えてもらえるよう連携を図っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりの一日の暮らし方や生活リズムを理解すると共に、本人のできないことよりもできる事に注目し、その方の全体像を把握する様に努めている。また、重度化してもできる事に注目し、体調を見て手伝って頂くようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人や家族との日々の関わりの中で思いや要望を聞き、介護計画に反映させるようにしている。また、フロア会議や日々のミニ会議の中でもモニタリング、カンファレンスを行っている。急な状態変化に応じて臨機応変に見直しができる様に努めている。	担当制をとっており1~2名の方を受け持っている。介護計画は担当者が立案しチームカンファレンスにかけ、最終チェックは計画作成担当者が行っている。日々モニタリングを行い、評価は3ヶ月毎に担当者が行いカンファレンスで検討している。家族への説明も担当者が行い責任を持って業務に当たっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個人ファイルを用意して、食事、水分、排泄等身体状況及び日々の暮らしの様子や本人の言葉やエピソード、気づき等を記録し、介護計画に活かしている。また、出勤時個人記録や申し送りノートを確認しこまめに情報を共有している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人、家族の状況に応じて通院の付き添いや、送迎、個別的な買い物支援など柔軟に対応している。本人や家族の意向にも配慮しながら家族の方への昼食の提供なども声掛けしている。		

グループホームこまくさ野村宮の前・南棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	利用者が地域で安心して暮らし続けられる様に、警察、消防、教育機関、民生委員、近隣スーパー、薬局、包括支援センター、地域住民、障害者就労支援施設そよ風の家の職員に運営推進会議へ出席していただき、意見交換、協力関係を築いている。本人、家族の希望により訪問理美容サービスを利用している。こまくさ祭りなどの行事の際、ボランティアの方々に来ていただき、協力関係を築いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	認知症専門医、歯科医、婦人科医、耳鼻科医など、本人、家族の希望するかかりつけ医となっている。受診は希望に応じて家族付き添い、職員同行など柔軟に対応しており、いつでも相談できる関係となっている。	かかりつけ医については利用開始時に説明し、従来通りか法人内のクリニックにするかを選択していただいている。2～3ヶ月毎に法人内のクリニックで健康チェックを受けている。また週1回看護師が来訪し相談に応じている。緊急時は24時間対応可能である。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	体調や些細な表情変化を見逃さない様に努めている。変化等で気付いた事があれば、毎日の様に訪ねて来てくれる看護師に報告し、適切な医療に繋げている。また、24時間いつでも相談できる体制になっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	今年度、1名の方が入院された。入院した際本人の情報等の提供を医療機関に行なった。また、職員がお見舞いに行っている。家族とも回復状況など、情報交換しながら退院後の対応について話し合っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合でも、その都度本人や家族の意向を伺い、最期の時をより良く過ごして頂ける様に医師、看護師、職員間で話し合い、連携を図り対応している。開設以来、5名の方の看取りを経験したが、重度化した方のケアや終末期ケアは難しいと感じている。現在も学習に励み、実践に取り組んでいる。	終末期に近い状態になったら家族と医師が面談し医療についての希望を聞き方針を決め、終末をどこで迎えるかも話し合いで決めている。ホーム内での看取りを数例経験した。利用者も家族も安心して最期を迎えられるよう学習し実践に取り組んでいる。3月にお亡くなりになられた方には利用者皆で大好きだった「ふるさと」を歌ってお見送りをした。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	採用時研修で対応について勉強する機会を設けている。また、フロア会議や日々のミニ会議でも実際に起きた事故や、予測される事故、急変時の対応について話し合い勉強をしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	今年になって南、北ユニットそれぞれが出火した場合を想定して、合同で4回避難訓練を行った。うち一回は、近隣住民や民生委員の方々にも参加して頂き、消防署立ち合いで消火器による初期消火の訓練も行った。	年4回避難訓練を計画している。そのうち1回は総合訓練で地域の方や消防署にも参加をお願いしている。昨年は地域の方4～5名の参加があった。車椅子での避難や利用者の誘導にも協力を頂いた。同時に消火器を使った消火訓練を地域の方も一緒に消防署員から指導して頂いた。今年9月には夜間を想定した訓練も実施し、実施内容は記録に残しシミュレーションに活用している。	

グループホームこまくさ野村宮の前・南棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	援助が必要な時も本人の気持ちを大切に、目立たぬよう静かにさりげない言葉掛けや対応に配慮している。また、自己決定しやすい言葉掛けをするように努めている。利用者を人生の先輩として敬い、利用者の尊厳やプライバシーの保護の大切さをフロア会議や研修で確認し合っている。	年長者として常に敬意を払い一人ひとりに接するようにしている。フロア会議では事例ごとに尊厳やプライバシーの保護について話し合い、職員全員で利用者の気持ちを大切にしたい対応をしている。ホーム便りに載せる写真の可否は利用開始時に相談し決めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者一人ひとりの状態に合わせて声を掛け、希望や願いを言えるような場面作りを行なっている。意思表示が困難な方に対しては、表情や全身での反応を注意深くチェックし、些細な事でも自ら決定できるような場面作りや働きかけを行なっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れは持っているが、一人ひとりのペースを大切に、その日その時の本人の希望に添えるよう柔軟に支援している。また、本人のサインを読み取り、休憩場面を作るなどの個別な対応に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	個々の生活習慣に合わせ、こだわりのスタイルが継続できるよう支援している。服装や髪形、スカーフ、帽子などのその人らしさが保てるように支援し、毎朝の化粧やなじみの美容院へも出かけている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	畑で収穫した野菜などで煮物や漬物を調理したり、利用者のなじみの料理を個々の力を活かしながら職員と一緒にしている。食事の準備から片付けまで役割を持ち行なっている。職員と利用者が同じテーブルを囲んで、楽しく食事ができるように雰囲気作りにも努めている。両ユニットで焼き肉会を行なったり、誕生日会には本人の希望に合わせた料理を作りお祝いしている。	ほぼ全員の方が自力摂取できる。ソフト食や粥の方もいるが、大半の方は軟飯を召し上がっている。ほとんどのの方が準備や片づけ等に何らかの役割を持ち積極的に関わっている。おやつは手作りすることが多く、訪問調査当日もおやつにするおでんを楽しそうに仕込んでいた。誕生日やクリスマスのケーキも手作りしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	チェック表を用意し水分量、食事量の把握をしている。個別に高カロリー食品や、ソフト食を提供している。食事がすすまない時は補食をしたり、体調に合わせて食事の時間をずらす、マッサージを行なうなど個別に合わせた支援を行なっている。月に一回、栄養士と一緒に食事をしながらアドバイスを受けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの能力に応じた対応を行なっている。特に就寝前の口腔ケアは確実にできるような支援をしている。利用者に合わせガーゼを使用したり、嚥下機能のリハビリに口腔マッサージを行なうなど、食べ続ける事ができるように支援している。		

グループホームこまくさ野村宮の前・南棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を使用し、個々の排泄パターンを把握することで、その方に合ったパットの使用やさり気ない誘導を行なっている。また、パットの選択などは、メーカーのケアアドバイザーにも相談に乗ってもらっている。失敗した場合でも本人が傷つかないように周囲に配慮しながら支援している。	自立の方が3割強、全介助の方が3人いる。排泄チェック表を用いて個々の排泄パターンを把握し適切な頃合いで声かけや援助を実施している。下着の選択にも配慮し、その方に合ったものを身につけていただいている。失敗した場合でも周囲に配慮しながら、本人が傷つかないようにトイレや自室で対応している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェック表を使用し、水分補給、繊維質の多い食材、乳製品を取り入れ、便秘対策に取り組んでいる。また、腸の動きをよくする為に腹部マッサージやホットタオル、体操、散歩など身体を動かす機会を作っている。下剤を服用する場合は、個々の状態に合わせた使用量や頻度を職員間で検討している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一人ひとりの生活習慣や希望を大切に、くつろいだ気分で入浴できるように支援している。利用者の状態に合わせて、浴槽内に椅子を使用したり、シャワー浴を行なうなど負担を軽減した対応に努めている。季節のしょうぶ湯やゆず湯を楽しんでいたり、入浴剤も好みに合わせ選んでいただけるようにしている。	入浴日は一応決めてあるが、本人の希望を尊重しその方の好まれる時間帯や入り方を決めている。毎日希望される方もいる反面拒否される方もおり、最低週2回は入浴していただけるよう支援している。拒否の強い方には体重測定を勧め浴室に行っていたり、足拭きマットは1人ごとに交換し使用している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	散歩や体操等、日中の活動を促し、生活リズムを整え安心して気持ちよく眠れるようにしている。利用者の希望に合わせ、居室、ソファ、畳スペースで休息される方もいる。眠れない方には、温かい飲み物を用意したり、話をするなど対応している。寝具もその方に合わせ選ぶようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個別の服薬ファイルを作成し、全職員が内容を把握できるようにしている。服薬は手渡しや口に入れたり、嚥下の悪い方へも工夫をし、内服しやすいようにしている。また、内服できているか確認もしている。処方の変更があった場合は、ノートや、個人記録に記録し状態変化の観察に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日頃より掃除、洗濯物干し、洗濯物たたみ、食器洗い、お椀拭きなどの家事仕事や花の手入れ、裁縫、畑仕事など得意分野や、知恵を発揮できる場面を多く作っている。また、その際には感謝の言葉を伝える様になっている。季節行事や、外出、誕生日会では、利用者と相談し計画するようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日は、散歩に出掛けたり、散歩の途中で自宅へ寄ったり、本部行事やスーパー、薬局などへも外出している。一人ひとりが季節を感じて頂けるように、お花見やバラ園見学、ぶどう狩り、紅葉狩りなども計画し外出している。	杖や歩行補助機を使用し自力で散歩に行かれている。車椅子の方は1人で、その方の車椅子を他の利用者が押していただくことも多い。天気が良ければ午後の暖かい時間帯を選び毎日のように近くの公園やホームの周辺を散歩している。近所のスーパーへ行くこともある。季節毎に花見やブドウ狩りにも出かけている。	

グループホームこまくさ野村宮の前・南棟

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の協力を得て少額のお金を手元を持っている利用者もあり、買い物を楽しんでいる。お金を施設で管理している方も、買い物の際はご自身で支払って頂けるような支援をし、安心感や満足感が得られる様にしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	居室は電話を設置できるようになっている。希望に応じて家族や知人に電話を掛けたり、とりついたり、携帯電話にて家族と連絡を取り合っている利用者もいる。プライバシーに配慮しながら、個別に対応している。また、年賀状や絵手紙教室の作品を送ったりもしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者にとってなじみの物、生活感や季節感のある物を配置したり、利用者の作品を飾ったりし、家庭的な雰囲気作りにも努めている。その中で、居心地の良い安心できる場所になるように工夫している。	玄関には近所の方が育てた大きな菊の鉢植えや利用者の手による生け花が飾られている。壁には習字や絵手紙教室で作った利用者の作品も飾られている。居間は明るくゆったりとしていてくつろぎの場所となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リビングには畳スペースやソファがある。畳スペースではひなたぼっこをされたり、夕食後ソファにて話をされたりして、気の合った利用者同士でくつろげるスペースとなっている。また、玄関のベンチや廊下の突き当たりの机など、好きな場所を選び、過ごせるように工夫している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	寝具やタンス、本人の作った人形、家族の写真など、なじみの品々が持ち込まれ利用者一人ひとりの居心地の良い空間作りに努めている。	冷暖房用のエアコンが完備されている。北側の居室には床暖房も設備されている。家から持ち込んだ馴染みの家具や寝具を使い家族写真や手作りの人形も飾られていた。ベッドも清潔に整えられていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者の状況に合わせ、必要な表示を付けたリ、ベッドにL字柵を設置したり、手の届かない呼び出しボタンの代わりにベッド柵へ鈴をつけて鈴をならして呼んでいただくなど環境整備に努めている。利用者本人のわかる力、できる力を見出し職員間で話し合い、できる限り自立に向けた環境作りに努めている。		